月刊みんぱく

2022年
4月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和4年4月1日発行 第46巻第4号通巻535号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

特集
アフガニスタンを外から

アフガニスタンの言語・文化を覗き知る　吉岡 乾
バダフシャーンの青のきせき　末森 薫
南北をつなぐアフガニスタンの黄金装飾品　寺村 裕史
法学権威になった「師匠」　黒田 賢治

月刊みんぱく
2022年
4月号

目次

1 エッセイ　千字文
アフガニスタンを憂える
安井 浩美

特集
アフガニスタンを外から

2 **アフガニスタンの言語・文化を覗き知る**
――ヌーリスタンを望む窓辺から
吉岡 乾

4 **バダフシャーンの青のきせき**
末森 薫

6 **南北をつなぐアフガニスタンの黄金装飾品**
寺村 裕史

8 **法学権威になった「師匠」**
――イランのアフガニスタン難民と宗教教育
黒田 賢治

10 みんぱく回遊
クマと人とのかかわり
――生き物の飼いならしを考える
池谷 和信

12 みんぱくインフォメーション

14 ○○してみました世界のフィールド
遺跡のかたわらで魚を釣る
荘司 一歩

16 世界のバスケタリー×バスケタリーの世界
素材の選択
――アッサムのタケ利用から
上羽 陽子

18 シネ倶楽部 M
「暴音」の磁場形成
――「激動――偉大なるサバルアの歴史」
金 悠進

20 ことばの迷い道
言語の名前と地域名
宮本 亮一

21 編集後記・次号の予告

表紙
右上：中国甘粛省永靖県の炳霊寺石窟
（撮影：末森薫、2016年）
右下：パキスタンのクニシト村（撮影：吉岡乾、2019年）
左上：ウズベキスタンのカフィル・カラ遺跡遠景
（撮影：寺村裕史、2013年）
左下：イランの首都テヘラン（撮影：黒田賢治、2012年）

エッセイ 千字文

アフガニスタンを憂える

安井 浩美（やすい ひろみ）

昨夏、中央アジアに位置するアフガニスタンで二〇年ぶりにイスラーム主義勢力ターリバーンが復権した。旧ターリバーン政権は、極端なイスラーム原理主義を強いたことでも有名で、中部バーミヤーンにある二体の大仏破壊は世界の人が知るところである。

思い起こせば二〇〇一年の米国同時多発テロをきっかけに始まった米軍によるアフガニスタン空爆は、首謀者とされたテロ組織アルカーイダの指導者であったオサマ・ビン・ラーディン師をかくまった当時のアフガーン政権ターリバーンに向け行われた。あれから二〇年、息を吹き返したターリバーンは、二〇二〇年の米国との和平合意後、米軍の撤退期限が二一年八月末に決まると戦闘を激化させ、あっという間に首都カーブルを陥落させたのである。

ターリバーンがアフガニスタンを制圧すると二〇年前の恐怖が蘇（よみがえ）った国民は、国を捨て国外へ脱出しようとカーブル国際空港に押し寄せる事態が発生した。過去には、イスラームの教えのもと罪人に対し公開処刑が行われ、娯楽番組や音楽の視聴も禁じられ、女性の就労も禁止され、国民の自由も一気に奪われたのである。逃げたくなるのも理解できる。

米軍の撤退とならんで諸外国の組織で働くアフガーン人の退避プログラムも同時に行われていた。私も八月二七日にそのプログラムにより日本の自衛隊機で隣国パキスタンに退避した。当初はアフガーン人職員らとともに八月二六日に退避する予定だったが、この日カーブル空港で自爆テロが起こり、米軍人一三人と市民二〇〇人余りが犠牲となった。この日を境に国外脱出を試みるアフガーン人でカオス状態だった空港は、平常を取り戻したのである。それにしても、二〇〇人以上の犠牲を払い、二〇万人ものアフガーン人が国外退避をしたこのプログラムは、この国の未来にどのような影響を与えるのか想像するだけでも悲しくなる。

退避から三カ月ぶりにカーブルの自宅に戻ると、カレンダーも三カ月前のまま、時計も電池が切れて止まっていた。退避後、一カ月後には戻れると思っていたのである。街は、人も車もターリバーン兵の数も減り、静まり返っていた。しかし、国際社会から鎖国状態のターリバーン政権下で国内経済は破綻し、公務員の給与は未払いで生活は困窮している。人口の半分以上が貧困層と言われ、人々は明日生きられるかどうかの瀬戸際に立たされている。古来シルクロードの栄華を極めたこの国の未来を憂えてならない。

プロフィール
1963年大阪府生まれ、京都府育ち。京都の短大を卒業後、アパレル会社に勤務。その後1年間のシルクロード旅行を機に写真家の道に進む。1993年内戦下のアフガニスタンで難民キャンプなどを取材。2001年の米国同時多発テロ後に移住し共同通信社カーブル支局で通信員として働く傍ら、女性の自立や子供の教育を支援している。

特集

アフガニスタンを外から

アフガニスタンにはどのような文化があるのだろう？　昨今メディアでは政治・社会情勢が多く報道されているが、この国の文化的な側面はなかなか見えてこない。本特集ではそんなアフガニスタンを再発見するべく、東西南北、周囲の国を起点に眺めてみたい。

アフガニスタンの言語・文化を覗き知る
――ヌーリスタンを望む窓辺から

吉岡乾　民博 人類基礎理論研究部

アフガニスタンは「アフガーン人の国」の名に反して、多民族国家である。アフガーン人とはパシュトゥン人のことであり、タジク人、ハザーラ人、ウズベク人などといった民族をアフガーン人とは、普通、言わない。

約一〇万年前の旧石器時代からヒトの暮らしてきた地域であり、青銅器時代にはインダス文明とメソポタミア文明との交流網に含まれていた。歴史時代になると、前六世紀ごろのペルシアのダーレイオス一世による支配に始まり、マケドニアのアレクサンドロス三世、インドのチャンドラグプタと、東西の勢力が入れ代わり立ち代わりこの地を治め、風習も、宗教も、民族も、言語も、代わったり変わったり交ざり混ざっていく。

今のアフガニスタンの基礎になる、パシュトゥン人によるアフガーン帝国が成立したのが一七四七年。半世紀後には諸大国の狭間で翻弄されはじめ、爾来、争乱の地となってしまう。百年と続いた安寧はない。「文明の十字路」はいつだって、出会い頭の事故を招くのだ。

昨年八月には、パシュトゥン人が主体の組織ターリバーンが支配権を奪回した。

ルンブール谷クニシト村でおこなわれていたブズカシ（2016年）

輝けるヌーリスタン語派

そんな文化の要衝国アフガニスタンは、北東からの巍々蕩々としたヒンドゥークシ山脈が南西へと緩やかに下っていき、砂漠の平地が広がる地勢を擁している。それに呼応する形で言語分布も、低地では少ない言語が広く話され、山地では多くの民族語が入り混じった分布を示している。特に、北東部のヌーリスタン州が面白い。

インド亜大陸からヨーロッパにかけ、インド・ヨーロッパ語族という、世界最大の広がりを見せる語族の諸言語が話されている。その語族の数ある下位グループのなかでも、言語数的、地理的に最大のものがインド・イラン語派である。そのグループは更に三分割でき、南・西アジアを眺望すれば、パキスタンの国語ウルドゥー語など、パキスタン中央からバングラデシュまでインド（・アーリヤ）語派が、アフガニスタンの公用語ダリー語など、パキスタン中央からイランより更に西方までイラン語派が分布している。それらがインド・イラン語派の外郭を描く一方、インドとイランとが衝突する境界線上で、ヌーリスタン州と、隣接するパキスタンの僅かな村だけに分布している数言語が、双方の特徴を兼ね備えつつ幾らか独特な特徴も示す独自グループを形成している。その名もヌーリスタン語派だ。

インド・イラン語派の語彙の対照　＊筆者作成

発音サンプルは下のURLもしくは右の2次元バーコード（QR）で
https://www.minpaku.ac.jp/research/publication/column/gekkan/media/2022-04

イラン語派		ヌーリスタン語派	インド・アーリヤ語派		語義
ダリー語	クルド語	カティ語	ウルドゥー語	ベンガル語	
asp	esp	ušúp	gʰōṛā	gʰoṛa	ウマ
xers	wirč	ic	rīčʰ / bʰālū	bʰaluk	クマ
tilā / zar	zērr	sun	sōnā	šona	黄金
boz	bizin	gaṣ	bakṛā	bɔkra	牡ヤギ
če	či	kəyá	kyā	ki	何
sē	sē	tre	tīn	tin	三
šaš	šeš	ṣu	čʰe	čʰɔy	六
čahār	čwār	štwo	čār	čar	四

言語の話はどうしても難解なので、上の表では単純化して特徴を例示しよう。ヌーリスタン系は「ウマ」「クマ」などはイラン系と同じ語源、「黄金」はインド系と同じ語源の単語を用いているが、「牡ヤギ」はどちらともまったく違う。語源が同じ単語間であっても、例えば語頭音の対応を見れば、「何」はインド系とヌーリスタン系とが同じ傾向を示すが、「三」「六」では系統ごとに区々、「四」ではインド系とイラン系とが似る。片や文法面では、やはりインド・イラン語派としてまとめるのが妥当な類似性が見出だせる。

独自性と共通性との狭間で、ヌーリスタン語派はこの地だけに光り輝く。価値高いアフガニスタン独特の宝は、何もラピスラズリばかりではない。

アフガニスタンの民族言語分布図
最大人口の民族はパシュトゥン人である
＊筆者作成

引き付けるブズカシ

ヤギといえば、ヌーリスタン語派のカティ語が話されているパキスタンのヌーリスタン人の村で、ブズカシ（「ヤギ引き」）がおこなわれているのを見たことがある。目前で右へ左へと疾走する馬群と、朦々と立ち上る砂塵の濃さに圧倒された。

ブズカシは、頭と蹄を落としたヤギ（ヒツジ／仔ウシ）をボール代わりにした馬上ラグビーのようなスポーツだ。紀元前のスキタイ国家で既に前代からのスポーツであったといわれていたくらい歴史の長い競技であり、今日でも事実上、アフガニスタンの国技になっている。かつてNHK「シルクロード」で、ウイグル自治区でのキルギス人による試合が紹介されていたように、中央アジアでも方々でおこなわれている。一方で、東隣のパキスタンでは、ポロや、イギリス由来のクリケットがおこなわれることは多いけれども、一部民族の偏住する地域を除き、ブズカシがおこなわれているとは聞かない。

第一次ターリバーン政権下では、ブズカシは不道徳だとして禁じられた。その言い分はよく解らない。国内の偶像は毀され、遺宝は散佚し、人民は逃げ出していく。

「自らの文化が生き続ける限り、その国は生きながらえる」とはアフガニスタン国立博物館の掲げた標語だが、先行きの霧が晴れないままのこの第二次政権下で、果たしてこの地の文化や言語、そしてこの多民族国家自体の未来はどうなるのだろうか。

クニシト村では競技にヒツジが用いられる（2016年）

バダフシャーンの青のきせき

末森（すえもり） 薫（かおる）
民博 人類基礎理論研究部

アフガニスタン産の青い石

空の青、水の青、自然界は幻想的な青色で満ちている。青は、人がよく目にする色であるが、特に人工的な色が開発される以前では、実際に手にとれる青色の素材は限られていた。古代において、青の輝きを放つ物質として珍重された鉱石にラピスラズリ（lapis lazuli）がある。「ラピス」はラテン語で石を意味する。「ラズリ」はこの鉱石を産出するアフガニスタン北東部バダフシャーンにある場所のペルシア語名Lazhward（ラージワルド）を語源とし、後に英語のazure、フランス語のazur、スペイン語のazulなど青系統を示す色の名へと派生した。

ラピスラズリは、青色のラズライト（青金石）を主成分とし、黄色の硫化鉄や白色の方解石などを含む（半）貴石である。濃淡の青のなかに散らばる黄の粒や白の流線は、海に佇（たたず）む島々や空に浮かぶ雲のようであり、ラピスラズリのなかに小世界が広がる。この幻想的な鉱石が採れる場所は限られており、古代に流通したものの多くはバダフシャーンを走るヒンドゥークシ山脈の鉱床から産出したものである。古くから希少な交易品であったラピスラズリは、メソポタミアやエジプト、ギリシアに運ばれ、身分の高い人びとの装身具などとして愛用された。現在は南米産の石も出回っているが、バダフシャーン産のラピスラズリは依然としてアフガニスタンの重要な財源のひとつである。

バーミヤーンの青

六三〇年ごろ、唐の僧・玄奘（げんじょう）三蔵はインドに向かう途上で仏都・バーミヤーンの地を踏んだ。ヒンドゥークシ山脈中央部の渓谷に位置するバーミヤーンは、五世紀から八世紀にかけて仏教が栄えた地であり、渓谷の摩崖に開かれた数多の洞窟には、彫像や壁画で彩られた仏教世界があらわされている。バーミヤーンに一四日間ほど滞在した玄奘は『大唐西域記』のなかで、バーミヤーンの地理や風俗とともに、摩崖に彫りだされた二体の大仏（東大仏と西大仏）に言及している。「釈迦仏」とされる東大仏の天頂部の中央には、二輪車に乗る太陽神が描かれ、その周囲は青く塗られた。また、東大仏より西に九〇メートルほどの距離に開かれたE窟の天井には、青い天衣や宝飾品を身に着ける菩薩（ぼさつ）が描かれ、兜率天（とそつてん）をあらわした宮殿の背景も青で表現されている。これらの青は、ラピスラズリの原石を細かく砕いてつくった顔料を塗ったものである。バーミヤーンでは、世界的に希少であったラピスラズリをふんだんに用いて、空や天などが表現されていた。二〇〇一年の春、玄奘も見たであろうラピスラズリがつくる青の世界の一部が失われた。

ラピスラズリ原石の小世界。
光の当たり方で表情が変わる

東へ運ばれた青

バダフシャーンで採掘されたラピスラズリは東西に延びる交易路をとおって東にも運ばれた。古代中国では、紀元前からラピスラズリが流入していたが、西から東へと伝わっていった仏教と軌跡をともにして、その量は増加していった。西域北道の中間に位置するオアシス都市クチャのキジル石窟や、西域と中国の出入口であった敦煌の莫高窟（ばっこうくつ）、黄河上流に位置する永靖（えいせい）の炳霊（へいれい）寺（じ）石窟、長安（現在の西安）と程近い天水の麦積山（ばくせきざん）石窟など、交易路沿いにつくられた仏教石窟には、ラピスラズリの顔料で描かれた壁画が多く残されている。

バダフシャーンで産出したラピスラズリのうち、宝飾品などに用いられたものは、主成分の青色を多く含む良質な原石が多かったはずである。一方、顔料として砕かれたものの多くは、青色以外の物質を多く含む原石や破片であったに違いなく、顔料を観察すると青以外に白や茶の粒子を含んでいることが多い。これら青以外の粒子の含まれ方や粒子の大きさにより、ラピスラズリの青は鮮やかにもなり、くすみもする。同じ洞窟、あるいは同じ壁画の画面であっても、青の表情はさまざまである。絵師たちは、ラピスラズリの原石から良質な顔料を得るための精製技術や、顔料の使い方を工夫しながらさまざまな青を表現していたのである。バダフシャーンの特定の鉱脈からしか産出しない奇跡の石は、古今にわたり多様な青の色を放ち、人びとを魅了し続けている。

バーミヤーンE窟仏龕及び天井壁画《青の弥勒》想定復元（2021年）
東京藝術大学大学美術館「みろく―終わりの彼方 弥勒の世界―」展より（筆者撮影）

右：キジル石窟第80窟の壁画《讃嘆する王と妃》の模写。顔料の精製技術や描写方法により、さまざまな青が表現されている（制作・提供：正垣雅子）
左：青、白、茶が混ざるラピスラズリの顔料。砕いた粒の大きさで発色が変わる

南北をつなぐアフガニスタンの黄金装飾品

寺村裕史（てらむら ひろふみ）
民博 学術資源研究開発センター

「シルクロード」と聞くと、中国からギリシャ・ローマまで至る、いわゆる「オアシスの道」とよばれる東西に長く延びた道がイメージされるかもしれない。しかし、決して一本の道だけが通っていたわけではなく、都市と都市、街と街を結ぶ道路網を総称してシルクロードとよぶのがより実状に近く、そこには当然南北をつなぐ道も存在した。

そうした南北をつなぐ道のうちのひとつが、筆者がフィールド調査をおこなっているウズベキスタンのサマルカンドから、南のテルメズに至り、アムダリヤ（アム川）を渡ってアフガニスタンに入り、マザーリ・シャリフからその先カーブルまで通じる道である。

カフィル・カラ遺跡の発掘調査

シルクロードのオアシス都市として知られるウズベキスタンのサマルカンドは、その立地がちょうど東西南北の十字路に位置し、二〇〇一年にはユネスコの世界文化遺産に「サマルカンド――文化交差路」として登録された。筆者は、そのサマルカンドに所在するウズベキスタン共和国科学アカデミー考古学研究所（発掘調査当時）と日本側とで組織された共同調査隊の一員として、中央アジアの歴史や文化、およびシルクロードを通じた交流の実態解明を目指し、古代の都市遺跡であるカフィル・カラ遺跡の発掘調査を二〇一三年から継続的に実施してきた。

カフィル・カラは、サマルカンド市内中心部から一〇キロメートルほど南東に位置し、南方からサマルカンドに至る南北ルート上の玄関口のような場所に立地している。これまでの調査で、城塞内に設けられた建物の最奥部、中央に位置する部屋から、ゾロアスター教の女神ナナーのところに位置する遺丘で、高さは三メートルあまり、直径約一〇〇メートルの小高い丘（テペ）である。一九七八年のV・I・サリアニディらの発掘調査によって二万点を超える金製品が出土した。それらの遺物が発見されたのは、六基の未盗掘の土壙墓（どこうぼ）、すなわち地面に穴を掘っただけでマウンドなどをもたない墓であった。埋葬された人物が身につけていたものや、副葬品として埋納されたものが、当時の状況そのままで見つかったことが考古学的にも画期的なことであった。

カフィル・カラ遺跡出土の金製装飾品
（提供：日本・ウズベキスタン共同調査隊）

そこで発見された金製の装飾品のなかでカフィル・カラと共通点をもつ遺物としては、三号墓から見つかったペンダントが挙げられる。ガーネットが使われていることや円形垂飾の形、大きさ、金糸で垂下する製作技法などにも類似点が見られる。

装飾品から見た南北交流

両遺跡で発見された装飾品類は、単に似ているという理由だけで、直接の関係があると断定できるわけではない。しかし、南北をつなぐシルクロードのルート上に存在した両遺跡から出土した遺物が、当時としてもめずらしい黄金製品で技法などにも共通点が見られることから、何らかの系統的な関係を想像することは可能だろう。

ティリヤ・テペの三号墓の被葬者は副葬品から見て女性で遊牧系の民族的特徴を示し、葬られた時期は一世紀第二四半期ごろと考えられる。カフィル・カラよりも七〇〇年ほど古く、伝播（でんぱ）の向きとしては南から北へ、という流れになる。

ティリヤ・テペ以降、アフガニスタンでは金製の装飾品はあまり見られなくなるが、それゆえに類似した金製品のウズベキスタンでの発見は重要である。金製品を製作する技術が廃れたわけではなく、アフガニスタンの装飾品に関する技術は少しずつ変化しながらも存続し、当時の人びとの活発で広範な移動の証左として、時と場所を隔ててカフィル・カラとかかわりをもつことになったと考えておきたい。

と人物群像が刻まれた木彫板や、宝飾品類が発見された。

宝飾品類のなかでは、金製の装飾品で上部に環状の留め具と金糸が残った円形の垂飾や、ガーネットとみられる貴石が嵌（は）め込まれたハート形の飾りが特徴的なもので、これらはペンダントの一部と考えられる。こうした金製品は、ウズベキスタン国内の他の遺跡においてもあまり出土例がなく、七～八世紀ごろの当時の文化を知るうえでも貴重な遺物である。

ティリヤ・テペ出土の金製装飾品

二〇一六年に九州国立博物館と東京国立博物館で開催された特別展「黄金のアフガニスタン――守りぬかれたシルクロードの秘宝」を、観覧した方もいるかもしれない。その展示のなかで、ひと際目を引いたものが、ティリヤ・テペから出土した黄金の装飾品の数々であろう。

ティリヤ・テペは、アフガニスタン北部マザーリ・シャリフから西に一二〇キロメートルほど

ティリヤ・テペ出土のガーネット付きペンダント。円形垂飾の直径は0.9センチメートル（出典：V・I・サリアニディ著、加藤九祚訳『シルクロードの黄金遺宝――シバルガン王墓発掘記』岩波書店、1988年；カラー図版8）

カフィル・カラ遺跡の城塞近景（2014年）

法学権威になった「師匠」
——イランのアフガニスタン難民と宗教教育

黒田賢治（くろだけんじ）　民博 グローバル現象研究部

隣国に暮らす一六〇万人

アフガニスタンの隣国イランでは、パキスタンに次いで多くのアフガニスタンからの難民が、首都テヘランや北東部のマシュハドなどの大都市を中心に暮らしている。一九七八年に始まる紛争と一九九〇年代の内戦の戦禍から逃れた人びとである。エスニック集団としては、アフガニスタン本国では最大のパシュトゥン人はイランでは少数にとどまる。本国で三番目の人口をほこり、多くがイランと同じシーア派を信奉するハザーラ人がもっとも多い。イランのアフガニスタン難民は一九九一年に推計三〇〇万人とピークに達し、その後は帰還や再移住がおこなわれてきたが、二〇一六年の国勢調査でも約一五八万人が暮らしている。また難民として認定を受けない、書類上は存在しない「難民」の存在も知られてきた。

難民として国外に脱出できるのは、アフガニスタン国内で相対的に恵まれた階層であるともいわれる。しかしイランの建設現場や農場で過酷な肉体労働をおこなう姿からは、彼らの生活が容易であるとは決していえない。またイラン社会での差別もあり、不当な暴力を受けることも少なくない。

イランの公立学校には難民認定を受けた児童しか通うことができなかったが、二〇一五年の法改正によって、滞在条件やパスポートの有無にかかわらず公立学校への通学が可能となった。とはいえ、進学費用だけでなく、就学から得られる将来的なキャリアの不透明さもある。こうしたなか難民に高等教育の就学機会を提供してきたひとつが、シーア派のイスラーム法学者（以下、法学者と略記）を養成する宗教教育である。

寄合場ともなる法学権威執務事務所の広間（2008年）

アフガニスタン難民の宗教儀礼集団（2010年）

宗教教育の調査で出会った「師匠」

宗教教育では学費が不要なだけでなく、学生は入学時から奨学金という形で収入を得ることができる。奨学金は法学権威とよばれる高位の法学者たちが自身の信徒から寄せられた宗教税を財源とし、宗教を広めることを目的に学生に支給している。加えて、法学者であるイランの現最高指導者からも奨学金が支給されてきた。成績による多寡はあるものの、宗教教育の最終課程に達すれば年限もなく、奨学金を付与されながら学び続けることができる。卑近な言い方をすれば、学び続ける限りは、十分ではなくともある程度の収入と、学生としての滞在資格が保証される。一説にイランで宗教教育を受ける八万人の法学生のうちアフガニスタン人は一万八〇〇〇人にのぼるといわれている。

筆者は大学院生のときにイランの宗教教育について研究しており、調査ではアフガニスタン出身のハザーラ人の法学権威執務事務所にも足しげく通った。事務所はハザーラ人コミュニティの寄合の場でもあり、法学者や法学生のみならず一般のハザーラ人も日々多く訪れていた。ハザーラ人が外見的にはモンゴロイドの特徴を多く備えていることもあり、事務所のスタッフは筆者に、よく「同胞」と冗談で話しかけてきた。

当時、事務所の主要業務である信仰生活上の疑問に対応する部門の責任者を務めていたのは、五十代半ばだったファーゼリー氏だった。彼は大抵事務所の一角で、法学権威による返答書の「下書き」をしたためていた。休憩の際には、筆者を改宗させようと何度も信仰告白の仕方や教義、そして礼拝の仕方を教えてくれた。異教徒を改宗させることも法学者の責務なのだが、無理に改宗させようというのではなかった。彼からイスラーム法学の手続き論を学んだこともあり、筆者にとってフィールドの「師匠」の一人であった。

「師匠」は事務所の代表を務めた法学権威が亡くなったあと、彼の信徒や事務所を引き継ぐ形であらたに法学権威になった。彼はシーア派の大学者の仲間入りをしただけでなく、間接的にアフガニスタン難民の学生を支援する立場にもなった。彼とSNSを通じて連絡をとっているが、近年ではオーストラリアやドイツなどイランから二次移住したアフガニスタン難民のあいだにも信徒がいるのだという。積年の課題に加えて、このところのアフガニスタン情勢により多忙を極める「師匠」に、不肖の「弟子」である筆者ができることはないかと思案中である。

信徒への返答の「下書き」をしたためる「師匠」（2010年）

宗教都市ゴムを象徴する霊廟（2010年）

みんぱく回遊

クマと人とのかかわり

―生き物の飼いならしを考える

池谷和信
民博 人類文明誌研究部

民博には、クマと人とのかかわりを示す展示が意外に多い。中央・北アジア展示場のロシア北東部のチュクチの文化を紹介するコーナーでは、ホッキョクグマの毛皮が仁王立ちしている。かつてチュクチはホッキョクグマを狩り、その肉を食していた。しかし、ホッキョクグマが国際法で稀少動物に指定されると、狩猟対象ではなくなった。現在では、ときどき夜中に集落にやってきてゴミをあさる程度のかかわりしかない。

アメリカ展示場には、石でつくられたクマの彫像やアザラシをもつクマが彫られた墓柱がある。現地に住む人びとにとってクマは神話に登場する聖なる動物であるという。

Ⓐ 毛皮(ホッキョクグマ)(ロシア、H0278375)

アイヌと日本の比較

このほかに筆者がクマと人とのかかわりという視点から注目しているのは、アイヌの文化展示と日本の山のくらしを紹介する展示である。とりわけアイヌの文化展示場には、クマ関係の標本資料が多い。子グマに餌を与えるための給餌具、クマ送り儀礼(イオマンテ)のための祭壇、クマの頭骨や木偶、クマを美しく着飾るためのクマ用耳飾り、木彫りのクマなどである。アイヌ文化のなかでのクマは、単なる狩猟の対象ではないことがわかるだろう。狩猟では、子グマは生きたまま捕獲する。檻のなかで一年にわたり育てた後、クマに団子やクルミ、干魚などのお土産をもたせて魂をカムイモシリ(神々の世界)に送るという。クマ送り儀礼はアイヌが大切にしている伝統的な文化であったが、一九五五年に北海道庁の通達により事実上禁止された(二〇〇七年に禁止通達は撤回され、現在はおこなうことができる)。

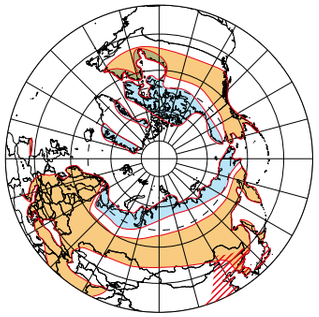
日本の文化展示には、現代におけるクマと人とのかかわりを示す展示がある。日本国内では北海道にヒグマ、本州と四国にはツキノワグマが生息するといわれる。「日々のくらし」セクションの「狩猟」コーナーには、クマ出没の注意をうながす看板や、生け捕りにするためのドラム缶でつくった罠、そしてクマ猟をするハンターの服などがある。これは、富山県における獣害対策の事例を紹介したものであるが、現代では北海道を含め日本各地で見られる光景である。

クマへのまなざし

アイヌの伝統文化としてのクマ送り儀礼と、現代日本の獣害対策としてのクマ猟は、年代も異なるが、クマに対する視点も異なっている。アイヌはクマを偉大な動物として敬い、クマ猟をおこなうが、日本の文化展示の「狩猟」コーナーではそのような姿は見られない。

いくつかのあらたな疑問も湧いてくる。日本の本州以南ではなぜ、クマをモチーフにした木彫りの文化が発達しなかったのか。なぜ、子グマを捕獲し、飼育しなかったのか。アイヌと日本でクマへのまなざしが違うのはどうしてだろうか。

これについて考えるためには、世界的な視点からクマと人との伝統的なかかわりを検討することが必要であろう。世界には、北米、ヨーロッパ、アジアまで、ホッキョクグマ、ヒグマ、ツキノワグマが生息している。これらの地域においてクマは聖なる動物であるとみなす文化が複数存在し、狩猟した際には山中で儀礼をすることも多い。アメリカの民族学者ハロウエルは、周極地域にクマ送り儀礼の文化圏があると考えたが、飼育を伴うクマ送り儀礼はアイヌに加えてサハリンからアムール川下流域の民族に共通して見られるものの、日本の本州以南では見られない。



周極地域のクマの分布

野生を飼いならす

完全に家畜化するのではなく、人が野生を飼いならしている生き物はクマだけではない。中央アジアの鷹匠のタカ、美しい羽根が装身具として利用されるアマゾンの鳥、ハチミツ採集のためのニホンミツバチなど、いずれも各地で飼いならされている生き物である。北アジアの飼育トナカイは野生にかえることもある。

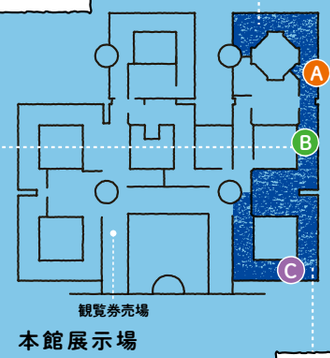
筆者は、野生動物の飼育に限らず、特定のテーマのもとに複数の地域の展示場を比較することで、一見異なって見えるものがつながり、あらたな発見が生まれる可能性があると思っている。それには、個々のものを見るだけでなくその背景にまで思いを寄せることが欠かせないであろう。みなさんも、自らのテーマを決めて民博の展示場であらたな発見を目指す世界一周の旅に出かけてみてほしい。

Ⓑ クマの頭骨(北海道、K0002118)

Ⓑ クマ用給餌具(どちらも樺太、上:K0002447、下:H0023780)

Ⓑ クマ用耳飾り(樺太、K0002407)

Ⓑ 木偶(クマ)(樺太、K0002545)



Ⓒ「日々のくらし」セクションの「狩猟」コーナー

Ⓑ 木彫「親子熊」(制作:荒木繁、H0277686)

H、Kからはじまる番号は標本番号です。

INFORMATION みんぱく インフォメーション

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event

特別展

日本・モンゴル外交関係樹立50周年記念特別展
「邂逅する写真たち ――モンゴルの100年前と今」

モンゴルの100年の変貌を写真で辿る体験型の「写真展」です。大草原と遊牧民とは異なるモンゴルに出逢えます。

会期　5月31日(火)まで
会場　特別展示館

■関連イベント
みんぱく映画会
「大地の静脈『Veins of the World』」

モンゴルの現代的な遊牧民の少年アマラの苦難と成長を通じて、金鉱開発による自然環境の破壊と立ち向かうモンゴル人の未来を描いた映画です。

日時　5月5日(木・祝)13時30分～16時(13時開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
上映作品　「Veins of the World」(日本語字幕あり、2020年)
解説　小長谷有紀(本館 客員教授)
司会　島村一平(本館 准教授)
※要事前申込(代表者を含む2名まで)、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※事前予約の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。
※定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
※オンライン配信はありません。

【申込期間】
■友の会電話先行予約
4月1日(金)まで
定員30名
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付
4月4日(月)～28日(木)

みんぱくワークショップ
「モンゴルのぼうしをつくってみよう」

日時　5月3日(火・祝)、4日(水・祝)
会場　第5セミナー室、特別展示館
講師　島村一平(本館 准教授)
諏訪正和(美術家)
対象　小学生以上(小学3年生以下は保護者同伴で参加のこと)
定員　各回10名
参加費　各回300円(大学生、一般の参加者は要特別展示観覧券)
※要事前申込、先着順
【申込期間】
4月5日(火)受付開始
イベント予約サイトまたは往復はがきにて。1通につき2名まで応募可能。(往復はがきは4月5日到着分から)

みんぱく無料シャトルバスのご案内

大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんぱくの間の直通送迎バスを特別展の会期中に運行します。詳しくは、みんぱくホームページをご覧ください。
※4月9日(土)に予定していた研究公演は延期となりました。日程は決まり次第お知らせします。

企画展

「焼畑――佐々木高明の見た五木村、そして世界へ」

日本や世界の焼畑を事例にして、現代社会と焼畑とのかかわり、日本文化のなかでの焼畑のもつ意義について紹介します。

会期　6月7日(火)まで
会場　本館企画展示場

■関連イベント
みんぱく映画会
「焼畑から見た日本の文化」

日本列島では山地部を中心にして先史時代以来現在まで焼畑がおこなわれてきました。焼畑をめぐる映画鑑賞と討論をとおして日本や地球にとって焼畑とは何かを考えます。

日時　4月30日(土)13時～16時(12時30分開場)
会場　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
上映作品　「椿山――焼畑に生きる」(1977年)
登壇者
野本寛一(近畿大学 名誉教授)
川野和昭(元鹿児島県歴史・美術センター黎明館 学芸課長)
池谷和信(本館 教授)
※要事前申込(代表者を含む2名まで)、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※事前予約の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。
※定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
※オンライン配信はありません。

【申込期間】
■一般受付
4月22日(金)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。

みんぱくワークショップ
「森のくらし――焼畑から見るSDGs」

日時　4月23日(土)13時～15時30分
会場　第3セミナー室、企画展示場
サポーター
池谷和信(本館 教授、フィールドワーカー)
大林龍矢(漫画家、イラストレーター)
対象　小学5年生以上
定員　10名
※要事前申込、先着順、参加無料(大学生、一般の参加者は要展示観覧券)
【申込期間】
受付中(定員に達し次第受付終了)
イベント予約サイトまたは往復はがきにて。1通につき2名まで応募可能。

研究公演

「伝承する人びと――北インド古典音楽の世界」

北インド古典音楽家4名の器楽演奏をとおして、師弟制度や師匠から継承した伝統を日本の地で繋ぐ、現代の北インド音楽の伝承について考えます。

日時　6月11日(土)13時30分～15時50分(13時開場)
解説　岡田恵美(本館 准教授)
参加形式
①会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員130名)
※要事前申込(代表者を含む2名まで)、先着順、参加無料(要展示観覧券)
※事前予約の方へ入場整理券を当日11時から本館2階会場入口にて配布します。
※定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
②オンライン(ライブ配信)
※申込不要、当日みんぱくホームページより自由視聴可能。

【申込期間】
■友の会電話先行予約
4月26日(火)～5月6日(金)
定員30名
【申込先】
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
■一般受付
5月9日(月)～6月3日(金)

展示リニューアル

多機能端末室がみんぱくシアターに生まれ変わり、東南アジア展示場横の休憩コーナーにデータステーションが新しく完成しました。また、探究ひろばもリニューアルしました。是非足をお運びください。

訃報　杉本尚次名誉教授

本館の杉本尚次(すぎもとひさつぐ)名誉教授(九〇歳)がさる二月二〇日に逝去されました。ご専門の文化地理学(民家の文化地理学)や文化人類学(西サモア研究)で優れた業績をあげられ、『日本民家の研究』等多くの著作で研究成果を発表されました。日本民俗建築学会長も務められました。また、野球文化の研究にも勤しまれました。一九七五年に教授として着任され、当館の開館に向けての展示作成にかかわり、一九九二年に定年退職されるまで、研究部長や運営協議員として当館の研究体制及び運営方針の確立に力を注がれ、館の発展に多大な貢献をされました。その後も後進の育成に努められました。謹んでお悔やみ申し上げます。

刊行物紹介

■大丸弘・高橋晴子 著
『年表で読む近代日本の身装文化』
三元社　17,600円(税込)

和装と洋装が拮抗した近代において、日本人はどのような葛藤を経て、洋装を受容したのか。その文化変容を、生活シーンの実況のなかで捉え、庶民の具体的な装いを、独自の枠組みの年表形式で記述した近代日本身装史。

みんぱくゼミナール

参加形式
①会場参加　みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
・要事前申込、先着順、参加無料
・当日参加受付あり(会場参加のみ、定員30名)

第520回
4月16日(土)13時30分～15時(13時開場)
古代オアシス都市における人びとの暮らしと宗教
――カフィル・カラ遺跡の発掘調査から
講師　寺村裕史(本館 准教授)
【申込期間】
■ 一般受付　4月13日(水)まで
※友の会電話先行受付は終了しました。

第521回
5月21日(土)13時30分～15時(13時開場)
ドキュメンタリー写真家B.インジナーシが見た現代モンゴル
講師　B.インジナーシ(写真家)
港千尋(写真家、多摩美術大学 教授)
川瀬慈(本館 准教授)
島村一平(本館 准教授)
モンゴル人ドキュメンタリー写真家B.インジナーシと研究者たちとの座談会をおこないます。写真で自己表象することの意味や他者表象との違いなどを考えます。
【申込期間】
■友の会電話先行予約
4月11日(月)～15日(金)
定員30名、会場参加対象
【申込先】
国立民族学博物館友の会(千里文化財団)
■一般受付
4月18日(月)～5月18日(水)

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

会場　第5セミナー室(定員42名)
※申込不要(当日先着順)、参加無料(要展示観覧券)、14時より整理券配布
※各回、開始30分前に開場
本館の研究者が「みんぱくの展示資料」「調査している地域(国)の最新情報」「現在取り組んでいる研究」についてわかりやすくお話しします。

4月3日(日) 14時30分～15時
台湾原住民族と焼畑農耕
話者　野林厚志(本館 教授)

4月10日(日) 14時30分～15時30分
モンゴルの"民族衣装"の100年前と今
話者　島村一平(本館 准教授)

4月17日(日) 14時30分～15時15分
ネパールの焼畑
話者　南真木人(本館 教授)

4月24日(日) 14時30分～15時
難民の声を劇に
――オーストリアの地方都市の演劇活動
話者　森明子(本館 教授)

お問い合わせ
国立民族学博物館 広報・IR係
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX 06-6875-0401
お問い合わせフォーム https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form

友の会

友の会講演会

受付フォームは友の会ホームページ内にあります。要事前申込、先着順。
※会員：無料
一般：500円(会場参加のみ)

第523回　4月2日(土)13時30分～15時
特別展「邂逅する写真たち――モンゴルの100年前と今」関連
モンゴルとSDGs
講師　小長谷有紀(本館 客員教員)
山極壽一(総合地球環境学研究所 所長)

参加形式
①みんぱくインテリジェントホール(講堂)(定員160名)
②オンライン(ライブ配信)(定員300名)
※特別展関連の本講演会は、みんぱくフリーパスをお持ちの方も無料でご参加いただけます。

受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/523tomo/

第524回　5月7日(土)13時30分～15時
企画展「焼畑――佐々木高明の見た五木村、そして世界へ」関連
佐々木高明を語る
――研究とその人物像
講師　ヨーゼフ・クライナー(ボン大学 名誉教授)
宇野文男(元福井大学 教授)
池谷和信(本館 教授)
参加形式
本館第5セミナー室(定員40名)
※5月はオンライン配信はありません。
国立民族学博物館第2代館長を務めた佐々木高明は、焼畑研究の第一人者、照葉樹林文化論の提唱者のひとりとして知られています。生前の佐々木とゆかりの深い話者3名による対談をとおして、研究者という側面にとどまらない佐々木高明の素顔に迫ります。

受付フォーム
https://www.senri-f.or.jp/524tomo/

お問い合わせ
国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く)　FAX 06-6878-3716
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

○○してみました世界のフィールド

遺跡のかたわらで魚を釣る

荘司 一歩（しょうじ かずほ）
東京大学大気海洋研究所特任研究員
民博 外来研究員

人気の釣り場は遺跡の近く

「週末、釣りに出かけないか？」との誘いを受けたのは、ペルー北海岸のマグダレーナ・デ・カオ村（ラ・リベルタ州）で発掘調査の準備を進めていた二〇一七年のことであった。村に一軒ある小さなホテルの管理人と近所の子どもたちに連れられて向かった先は、なんとわたしが発掘調査をする遺跡の目の前だった。たしかに、遺跡の近くで魚釣りをしている人をよく見かけるとは思っていたが、釣り人にとって人気の場所だとは知らなかった。

釣り竿（ざお）は使わない。ワラケーオとよばれる釣り糸と釣り針、錘（おもり）のセットを使い、カウボーイの投げ縄のようにくるくると振り回して、岸から三〇～五〇メートル先に投げ入れるのだ。ワラケーオの扱いはさほど難しくなく、細かいコントロールはさておき、ある程度の飛距離で海に投げ入れることはすぐにできるようになった。しかしながら、最初の三日間、わたしは一匹の魚も釣ることができなかった。子どもがすぐ隣で五匹、六匹と釣っている姿を横目に見ながら場所を変えてみたり、意固地になって日が暮れるまで釣り続けても、結果は変わらない。さんざん子どもにばかにされ、楽しくなんかちっともないとあきらめかけていた。

遺跡発掘の様子。写真奥に見えるのは人気の釣り場。家屋は村の住人が海水浴客で賑わう夏にのみ利用する（2017年）

村一番の漁師

そこでわたしは、村一番と名高い漁師のもとを訪れた。村人からウマン（グスマンという本名をもじったあだ名）とよばれて親しまれる彼は、中国系の移民を祖先にもっており、わたしを見つけると「パイサーノ（同郷の人）！」とよびながら歩み寄ってくる。彼に一日限定の弟子入りを志願したのだ。

この地域では、大型船が停泊することのできる漁港が少なく、現在でも伝統的な漁撈（ぎょろう）が続いている。ウマンは基本的に釣り漁一本で勝負しており、移動しながら釣り場を変え、魚のいる地点を探す。魚が多く潜む場所は個人で細々と漁撈を営む漁師にとっての最重要機密だ。ウマンは小さな椅子をもち歩き、座って釣りをするのだが、釣り場を離れるときは椅子の跡を消してから立ち去る。別の漁師が彼を追いかけて、釣り場を特定しようとしたらしいが、完全に証拠を消し去る彼の手口の前に、断念せざるを得なかったという逸話もあるぐらいだ。

海が荒れるなどして不漁となったとき、サトウキビ畑で日雇い労働をして飢えをしのぐ漁師もいるが、ウマンは決して畑で働かない。むしろ、魚の単価が高くなる不漁のときこそが腕の見せ所だという。知識や技術、情報、経験を駆使して、いかに他の漁師より多く釣果を上げるかに彼らの生活はかかっており、ここに各々が自分の釣り場を必死になって秘密にする理由がある。それは勝負の世界に生きることであり、農業や観光に比べて賭け事のような要素が強いといえよう。

村一番の漁師に弟子入りしてみました

ついに魚が釣れて喜ぶ筆者
（撮影：クリスベル・アルベルト、2017年）

右上：釣りの道具ワラケーオ。ナイロン製の太い釣り糸と釣り針、鉛の錘をつなぎ合わせたもの。板に巻き付けて収納されている（2017年）
右下：釣りをするウマン。釣れた魚は村のレストランや近郊の都市の市場に運ばれる（2017年）
左：ワラケーオを投げる様子。写真の少年は左利きで小さな体を目いっぱい使って投げていた（2017年）

勝負事としての釣りの魅力

友人たちと釣りに出かけた四日目、リベンジとして臨んだわたしはついに最初の一匹を釣り上げた。大きなニベ科の魚である。ウマンの管理人も近所の子どもたちも集まってきて祝福する。「すごい、今日いちばんの大物だな！」。そう言い残して、自分の持ち場にいそいそと戻っていき、また一心不乱に釣り始めた。皆、わたしに負けたくないようで、大物を狙い始めたのである。

「一度釣れたならば、同じ場所にワラケーオを投げ入れ続けるのが秘訣（ひけつ）なんだ」というウマンのことばを思い出し、さきほどと同じ場所を狙ってワラケーオを振り回す。すると見たことか、次々とあたりが続き、その日は合計八匹を釣り上げた。仲間内でいちばんの釣果を上げたわたしに向かって皆口々に「次はお前より多く釣るからな。次はいつ行く？」などと話している。なんだか誇らしい。どうやらこの村の釣り漁は、職業的に漁撈をおこなう漁師だけでなく、娯楽として楽しむ村人たちをも魅了してやまない勝負事のようである。

釣り上げた魚。上からニベ科のガジナサ、ロルナ、ギンポ亜目のトランポーヨ（2017年）

素材の選択
——アッサムのタケ利用から

上羽 陽子
民博 人類文明誌研究部

昔からタケは身近な植物素材として建築や生活に利用されてきた。タケの種類は世界中で1200以上もあるといわれている。インドのアッサム西部の人びとは、性質にあわせてタケの種類を使いわけ、用途に応じてさまざまな生活用具をつくりだしている。

多種類のタケの使いわけ

インドのアッサム西部の民家の敷地には、ひときわ目につくタケ製の大きなカゴがある。身体がすっぽりと入る大きさで、収穫した籾を入れておく屋外保存用のカゴだ。

快晴の日には、籾をこの保存カゴからとりだし、日干ししてから籾すりをする。籾殻と実とにわけるときにも、タケ製の箕や小さなカゴが活躍する。敷地には、これら以外にも農具や漁具などさまざまなタケ製カゴを見ることができる。

タテ芯よりも柔らかいタケでヨコ芯をつくる

ここアッサム西部では、家の周囲に数種類のタケを植え、管理している。村人は建材や家壁、フェンス、竿や筌などの漁具、カゴなど、用途に応じて、タケの種類を使いわけている。自らが植えていない種類のタケは、近隣の住民にもらうこともする。

屋内の穀物カゴや、米や豆を洗う小型のカゴの編み材には、敷地近くの竹林で育つ二種類のタケを用いる。タテ芯には柱や杭などにも使用する固くて強度のあるジャティ（*Bambusa tulda*）を、ヨコ芯にはしなやかで節間の長いビジュリ（*Bambusa assamica*）を用いる。

一方、冒頭の籾用の大型保存カゴには、敷地周辺の平地種のタケを用いない。離れた山地で育つ節間が長く、柔らかくて軽いドレバ（学名不明）とよばれるタケが使用されている。収穫期の終わりごろに、山地の人びとが大型保存カゴを製作し、平地まで天秤棒に吊るして運んでくる。平地の人びとは運んでいる途中やバザールでこのカゴを購入する。

山地のタケを網代（あじろ）編みした籾用大型保存カゴ
（写真はいずれもアッサム州、カムループ県にて2017年に撮影）

大量のタケヒモづくり

編み材用のタケヒゴはタケの稈を割り、さらに裂いてヒモ状にする。これはトンガルとよばれる。結束のための約六〇センチメートルの短いタケヒモも同じ名前でよばれる。この短いタケヒモは、物と物とを結びつけたり、吊るしたりするときに使う。

男性たちが一斉にタケヒモづくりをおこなうのは、雨季明けのフェンスづくりの時期である。この地域は、年間降水量が少ないところでも二〇〇〇ミリメートル、多いところでは四〇〇〇ミリメートルに達する。雨季が明けるころには、大量の雨によってタケ杭とタケヒモによるフェンスは壊れてしまう。

フェンスは家屋の境につくられるが、田畑の周囲にも立てられ、家畜の侵入を防ぐための重要な役割を担っている。フェンス用のタケ杭を捻り留めるため、大量のタケヒモが必要となるのだ。

タケヒモはどのタケでも製作されるが、山地で育つ大きくて柔らかいケコア（*Dendrocalamus hamiltonii*）とよばれるタケでつくったヒモは、他のタケでつくったものよりも丈夫だという。他のタケは一年しかもたないところ、ケコアだと五〜六年もつ。そのため、平地のマーケットでもタケヒモ用のケコアの稈が売られている。

上：雨季明けには大量のタケヒモを準備する
下：雨によって壊れたフェンスをつくり直す

どの素材を選択するのか

大量につくられるタケヒモだが、カゴの縁の補強や結束には用いられず、そういった用途には、より強度のあるトウが使用されてきた。しかし、同地域では現在トウを十分に確保することができず、カゴの縁の結束には、ポリプロピレンやプラスチックのヒモが代用されている。

同じく筌などの漁具も結束部分にはトウに代わって古タイヤチューブを裂いたものやプラスチックのヒモが用いられている。トウより扱いやすく強度があると製作者は言う。

それに対して、調査中に筆者が村内で買ってきた小型カゴを見て、滞在先の主人は「縁がポリプロピレン製ヒモだろ。僕がトウを手配して、取り替えるよ。今の製作者は使い込むと壊れるようにわざとトウを使っていないんだ」と言う。

フェンスづくりも調査地を訪れる度に、タケ杭とタケヒモからタケ杭とプラスチックヒモ、さらにはトタン製のフェンスへと移りかわってきた。

これまで使途に応じて多種類のタケを選択して使いわけてきた人びとが、その選択に工業製品が加わったとき、何をどのように選ぶのか、今後も注視したい。

シネ倶楽部M

「暴音」の磁場形成

金悠進（キム・ユジン）
民博 機関研究員

「激動――偉大なるサパルアの歴史」

原題：GELORA: Magnumentary of Gedung Saparua
2021年／インドネシア／インドネシア語／64分／オンライン公開あり（英語字幕で視聴可）
監督：アルフィン・ユナタ
出演：Arian13（アリアン・アリフィン）、ウェンディ・プトラントほか

サパルア公園には「健康、レジャー、スポーツ」と書かれている（バンドン、2017年）

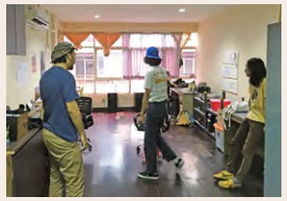
インドネシアのイスラーム教徒にとって聖地とはメッカである。しかし、同国第三の都市バンドンの若者たちにとって「聖地」とはサパルアである。本作は、バンドンの中心部に位置する建物サパルアをめぐるインドネシア・アンダーグラウンド音楽史のドキュメンタリー映画である。

二〇一五年にわたしがサパルアを初訪問したとき、すでにこの建物は音楽ライブ会場としての役割を終え、スポーツ会場として改装中だった。周りの広場は市民がランニングする憩いの場となっていた。約二〇年前に、この場所でズタボロの革ジャンを着たモヒカン頭の少年たちが暴れ狂っていたとは思えなかった。約四〇年前に、この場所でヒッピー風の若者たちがサイケデリックなロックに酔いしれた退廃的な雰囲気は微塵（みじん）も感じられなかった。しかし、本作に出演するミュージシャンや音楽評論家などの「目撃者」たちは、その歴史的事実を克明にいきいきと語る。

バンドンのアンダーグラウンド音楽前史

本作は、インドネシアにおけるアンダーグラウンド音楽、とりわけ一九九〇年代のデスメタルなど、激しいサウンドとパフォーマンスを特徴とする文化実践、およびメインカルチャーの歌謡ポップスや商業的ロックに対抗するサブカルチャーに焦点を当てている。音楽空間としてのサパルアを実質的に支配していたジャンルは、デスメタル、ハードコア、パンクロックといったアンダーグラウンド音楽だった。九〇年代当時は毎週末、朝から晩までこの三つのジャンルを中心とするバンドが演奏していたという。

その歴史的な背景として、植民地時代からバンドン市民がオランダ人エリートの西欧的でモダンなライフスタイルを模倣していたこと、バンドンが娯楽の中心地として栄えていたことが歴史家によって語られ、当時の歴史資料によってもその証言が裏付けられる。また「ロックンロールが大好きだった」と


イラマ・ヌサンタラのスタッフ
（ジャカルタ、2019年）

イラマ・ヌサンタラの事務所
（ジャカルタ、2019年）

バスケットボールやバドミントンの試合会場としても使われる現在のサパルア（バンドン、2017年）

一九六〇年代に活躍した音楽家が語るように、バンドンがロック全盛期に入ると、同市で創刊された雑誌『アクトゥイル』は「西洋のプロパガンダ」として「セックス、ドラッグ、ロックンロール」のヒッピーカルチャーを体現していたという。バンドンはこうした洋楽かぶれの土壌、対抗文化の磁場として歴史的に発展したことがうかがえる。

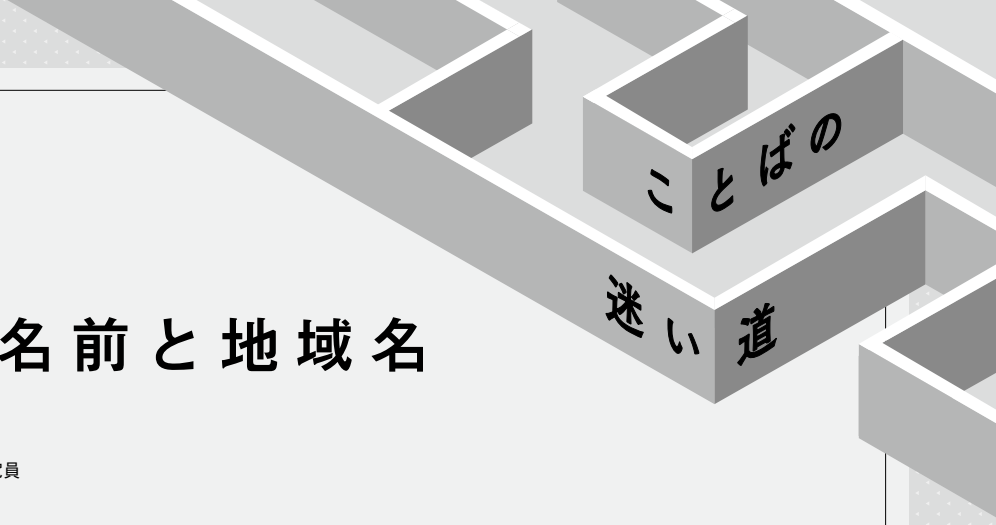
アンダーグラウンド化するサパルア

サパルアはもともとスポーツ会場として建設されたが、一九九〇年代から音楽ライブ会場の役割を担うようになった。とはいえ、当初開催されたのは学園祭などの音楽イベントが中心で、アンダーグラウンド音楽は排除された。「アンダーグラウンド音楽は機材を破壊するから」と出演を禁じられ、パンクバンドはブラックリストに載った。そこで彼らは「ならば自分たちで企画すればいい」と、まさにDIYの精神で、サパルアでのアンダーグラウンド音楽ライブを自主企画・開催した。会場には収容人数三〇〇〇人を超える聴衆が集い、会場外を含め七〇〇〇人ほどが駆けつけた。その当時、これほど大々的なアンダーグラウンド音楽イベントが開催されていたのは、同国ではサパルアだけだったという。そして、こうした自主企画ライブが次第に数多く開催されていくにしたがって、「サパルア＝アンダーグラウンド音楽の聖地」として定着していった。本ドキュメンタリー映画では、デスメタル、ハードコア、パンクロックの激しいライブ演奏に、聴衆が暴れ騒擾（そうじょう）状態となった当時の様子が映像で蘇（よみがえ）る。スハルト独裁政権末期に、まるで行き場のない不満や怒りをぶつけ合うかのような一触即発の臨場感が伝わる。

語る、撮る、残す

本作の監督はジャカルタを拠点とするアーカイブ団体「イラマ・ヌサンタラ」の創設者である。コロナ禍で音楽業界が大打撃を受けるなか、過去の音源や映像のアーカイブズ化に関心が高まるインドネシアで、いち早く自国のレコード資料・映像資料・雑誌資料のデジタル・アーカイブズ化に取り組んできた。一九九〇年代以降生まれの若者たち――サパルアを知らない世代が多数派を占める同国で、こうしたドキュメンタリーを通じて、サパルアという文化遺産を当事者たちの語りによって継承していくことの重要性を監督や出演陣は訴える。

見どころ満載の本作だが、音楽も「聴きどころ」である。シーンに応じた選曲が素晴らしい。



言語の名前と地域名

宮本 亮一（みやもと りょういち）
東京大学附属図書館特任研究員

現在のアフガニスタン北部、ウズベキスタン南部、タジキスタン南部あたりは、かつてひとつの地理的な枠組みを形成し、前2世紀ごろ以降、長いあいだトカリスタン（あるいはトハリスタン）とよばれていた。これは「トカラの土地」という意味で、トカラ（トハラ）自体はこの地域を支配した遊牧集団に由来する。

わたしの専門はこの地域がイスラーム化する前の歴史で、研究のための重要な資料は現地で使用されていたことばで書かれたものだ。9世紀ごろまでこの地域で使用されていた言語は、インド・ヨーロッパ語族、イラン語派の中世語、東方言に分類される。古い時代のイラン系言語を勉強するためには、まず近世ペルシア語を学びイラン語の大枠をつかみ、次にサンスクリット語で古い言語の複雑な文法に慣れ……などなど、目的の言語を学び始める前の苦労が多いのだが、トカリスタンの現地語には、学習を始めた後にもひとつの奇妙な問題がついてまわる。それは、この言語がトカリスタンの現地語であったにもかかわらず、「バクトリア」語という名前でよばれていることだ。

バクトリアとは、この場所がトカリスタンとよばれる以前に使用されていた、ほぼ同じ範囲を指す地域名だが、バクトリア語が使用されていた時代にはすでに広範囲の地域名としては使われず、主要都市（バルフ）を指すだけになっていた。つまり、言語の名前に適用するにはあまり相応しくないのである。では、トカリスタンの名前の由来であるトカラを利用して「トカラ」語とよべば良いと思われるかもしれないが、そうできない事情があった。それは、1960年代にこの言語の研究が進み、名称が考案された際、インド・ヨーロッパ語族にトカラ語とよばれている言語がすでに存在したからだ。

トカラ語は現在の新疆（しんきょう）ウイグル自治区クチャ（庫車）あたりで使用されていた言語である。ただし、研究の初期段階で資料に見える固有名詞がトカラと読める可能性があることから提案されたその名称は、これまで多くの疑問が投げかけられているものの、問題が決定的に解決されないまま便宜的に使い続けられてきた、いわば曰（いわ）く付きの名前である。しかし、バクトリア語よりもトカラ語の方が古くから研究されていたため、同じ名前を使うこともできず、より古いバクトリアという地域名がトカリスタンの現地語の呼称として採用されたのである。真にトカリスタンの言語であるバクトリア語を「真トカラ語」とよぼうとした研究者もいたが定着しなかった。

このようなわけで、わたしはトカリスタンの歴史を研究しているにもかかわらず、トカラ語ではなくバクトリア語の資料を扱っている。トカラ語の命名にかかわる複雑な経緯を考えれば、いま定着しているそれぞれの名前を受け入れざるをえないが、それでもなんだか腑（ふ）に落ちない気持ちを抱えながら、バクトリア語という名称を使い続けている。

『月刊みんぱく』は
国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06–6877–8893（平日9：00〜17：00）
https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく　2022年4月号

第46巻第4号通巻第535号　2022年4月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　園田直子
編集委員　三島禎子（編集長）　池谷和信　上羽陽子
岡田恵美　齋藤晃　吉岡乾
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス紙 FSC FSC® C013678
VEGETABLE OIL INK
GREEN PRINTING JFPI P-810282

月刊みんぱく

2022年
4月号

編集後記

本号の見どころを紹介したい。ひとつはグリーンプリンティングという、より環境に配慮したマークを取得した。もうひとつは、「聴きどころ」もそなえた多機能雑誌であること。3頁に2次元バーコード（QR）の発音サンプルが付録としてついている。執筆者吉岡さん自身の声で録音されている。

さて本号の特集では、戦争や貧困のイメージで塗りつぶされているアフガニスタンをあえて「外から」見ることによって、古代文明の時代から、同地域が文明の十字路であることに焦点が当てられた。言うまでもないが、文明や文化が移動するためには、人の交流があってこそのことである。

ひるがえって現代の様子を眺めてみると、日本には3500人程度のアフガニスタン人が在留している。日本において、アフガニスタン人があらたに難民として認められるのは毎年数人程度である。アフガニスタン国内外の難民が数百万人いるというから、日本とアフガニスタンの人的交流は非常に少ないと考えざるを得ない。

一方、質的な面では、故中村哲（なかむらてつ）医師によるアフガニスタンでの援助活動が、人的交流を深めたことはわれわれの記憶に強く刻まれている。中村医師は、危険地域で平和活動をするとき、日本の憲法9条が自分たちを守ってきたと語っていた。平和な信頼関係を築くことが一番の安全保障だという氏のことばの重みを、昨今のウクライナの情勢を耳にするにつけかみしめたい。（三島禎子）

次号の予告 5月号

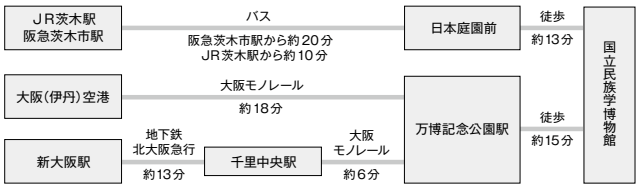
特集「**食と戦争・帝国主義**」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151
開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）
休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は翌日が休館日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

特別展図録・オリジナルグッズのご案内

国立民族学博物館では特別展「邂逅する写真たち――モンゴルの100年前と今」を開催中です。会場のショップでは、図録などの関連書籍のほか、特別展だけのオリジナルグッズもとりそろえて、みなさまのご来館をお待ちしております。

※画像はイメージです。

オリジナルサコッシュ
B.インジナーシが映す現代モンゴルの草原をプリントしました。
1,500円（税込）

オリジナルマグカップ
絵本作家の岡島礼子さんのイラストと一緒にティータイム。
1,800円（税込）

オリジナル クリアファイル
モンゴルの 100 年前と今がクリアファイルに！
385円（税込）

特別展図録
『邂逅する写真たち――モンゴルの100年前と今』
編者：島村一平
発行：国立民族学博物館
本文200頁、 H225mm × W200mm
ISBN：978-4-906962-98-3 C1039
2,530円（税込）

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ　E-mail shop@senri-f.or.jp　水曜日定休
オンラインショップ「World Wide Bazaar」　https://www.senri-f.or.jp/shop/

オンラインショップ